平成31年度（2019）の行事予定

生物多様性豊かな草原の復元管理計画
植生調査とネザサ刈りを行います

東お多福山草原保全・再生研究会

管理区域を1年かけて複数回に分けて刈り取る活動をしています。刈り取り活動では鎌や刈り込み鋏で草を刈ったり、刈り払い機で刈り倒した草の集積したりします。班を編成してリーダーの指示のもとで活動しますが、ご自身のペースで作業できます。調査班は草花に詳しい人を中心に編成しています。植生を勉強しようと思う人は調査補助員として、筆記だけの人は記録員として、カメラをもってカメラマンとして参加いただきます。いろいろな参加形態がありますので、気楽に参加をご相談ください。

○集合場所は東お多福山北方、土樋割峠です。

平成31年4月13日（土） 予備日 4月20日（土）	早春の全面刈り 大人数必要です	集合 9:00AM	申込4月3日まで
平成31年5月15日（水）	春の植生調査及び外構の笹刈り	集合 9:00AM	申込5月5日まで
平成31年7月17日（水）	夏の植生調査及びコドラートの笹刈り 大人数必要です	集合 9:00AM	申込7月7日まで
平成31年10月2日（水）	秋の植生調査及び外構の笹刈り	集合 9:00AM	申込9月22日まで
平成31年11月23日（土・祝） 予備日 11月30日（土）	晩秋の全面刈りその1 大人数必要です　現役世代歓迎！	集合 9:00AM	申込11月23日まで
平成31年12月7日（土） 予備日 12月14日（土）	晩秋の全面刈りその2 現役世代歓迎！　現役世代歓迎！	集合 9:00AM	申込11月27日まで
平成32年2月29日（土） 予備日 3月7日（土）	晩秋の全面刈りその2 現役世代歓迎！　現役世代歓迎！	集合 9:00AM	申込2月19日まで

行事の問い合わせは、桑田（H・P 090-3166-9785）までどうぞ。
○当日の天候判断は、前日の17：00迄に行います。各団体で参加者に通知してください。
○参加人数は各正会員（団体）、各協力団体でまとめ、副会長 桑田または副会長 橋本（FAX：079-559-2014、E-mail：quercus@hitohaku.jp）までお知らせください。
○個人参加の方は当会HPよりお申し込みください http://otahuku2016.wixsite.com/higashiotafuku
○傷害保険、交通費などは各自で対応をお願いいたします。

申込HPのQRコードはこちら→

平成30年度（2018）の報告

平成30年度は下記の通り、行事を行いました。

平成30年4月7日（土）	早春の全面刈り		参加者：57名
平成30年5月24（土）	春の植生調査・外構部のササ刈り		参加者：40名
平成30年7月18日（水）	夏の植生調査・外構部のササ刈り		参加者：53名
平成30年10月3日（水）	秋の植生調査および外構の笹刈り		参加者：48名
平成30年10月7日（日）	「東お多福山草原で自然を学ぼう!親子ハイキング」		参加者：11名
平成30年10月28日（日）	「こうべ森の文化祭」への参加	Staff：5名	
平成30年11月5日（日）	「ひょうご森のまつり2016」への参加	Staff：5名	
平成30年11月24日（土）	晩秋の全面刈り（その1）		参加者：51名
平成30年12月8日（土）	晩秋の全面刈り（その2）		参加者：54名

東お多福山のススキ草原の再生を目指して

生物多様性豊かな草原の復元管理計画
平成30年（2018）　第11年次報告書

はじめに

かつて、東お多福山には多様な草原生植物が生育する六甲山系最大のススキ草原が広がっていました。しかし、戦後の採草活動・刈り取り管理の停止、山火事の減少などによりネザサの勢力が増してススキや草原生植物が極端に減少しています。私たちは、生物多様性の保全・再生の観点からススキ草原の復元を目指して平成19年度より活動をはじめています。

活動報告

今年度は特別保護地区の眺望点から東お多福山山頂にかけての斜面と登山道沿いを新規刈り取りエリアと定め、高さ2mを越えるネザサを刈り取り、同保護地区での草丈の低い草原の面積の拡大を図りました。実験区のモニタリング結果では、夏の選択的刈り取りを実施した区画ではススキの被度が増加傾向にあること、その他の区画も含めて草原生植物の生育状況が良好であることを確認しました。また昨年度に引き続き阪神間の文化財の屋根葺き材として用いるススキを収穫しました。昨年度2月に開催したシンポジウムの効果もあり、HPからの申込による参加人数が昨年度よりも増えました。

普及活動では神戸県民センターと協働で親子ハイキングを開催しました。平成30年7月豪雨、8月の台風の影響で、土樋割峠に向かう舗装道路が陥没し、車両による道具運搬に支障が出てしまい、秋の刈り取りで管理できた面積が前年度よりやや狭くなる影響がありました。道路補修については芦屋市に申し入れ、平成31年3月の活動までには修繕される見込みです。

写真（左）：1974年当時の東お多福山のススキ草原。わたしたちはこの姿に再生することを目指しています。

写真（右）：特別地域では晩秋にネザサを低く刈り込むため、見通しのよい草原に姿が変わります。

ネザサ刈りと植生調査を行っています。

■実施団体
東お多福山草原保全・再生研究会
〈メンバー〉ブナを植える会、こうべ森の学校、（公社）日本山岳会関西支部、芦屋森の会2001、神戸植生研究会、淡河かやぶき屋根保存会くさかんむり、西宮明昭山の会、NPO法人豊かな森川海を育てる会、マスターズ山登りの会

■協力機関
兵庫県神戸県民センター、環境省近畿地方環境事務所、神戸市建設局公園部森林整備事務所

この事業は下記の助成を受け実施しています。
花王・みんなの森づくり活動助成、公益財団法人イオン環境財団環境活動助成、生物多様性ひょうご基金、公益財団法人大阪コミュニティ財団「東洋ゴムグループ環境保全基金」、公益信託コープこうべ環境基金

事務局　〒669-1546 兵庫県三田市弥生が丘6丁目　兵庫県立人と自然の博物館気付　橋本佳延
東お多福山草原保全・再生研究会
TEL & FAX 079-559-2014　E-mail:quercus@hitohaku.jp

これまでの調査結果

本活動では平成19年秋より年1～2回の刈り取りを実施し、ススキや草原生植物の生育状況、種多様性の変化を調査しています。草原内に設置した5つの10m×10mの方形区の中にさらに3つの小方形区(2m×2.5m)を設け、方形区内の植物相と小方形区内の植物の種数、ススキとネザサの草丈、各植物の被度を計測しています。

(1)調査区2の状況

2018年は秋のみ刈り取りを行いました。ネザサの被度は90.0％(図2)、最大高は0.63m(図1)といずれも前年よりもやや低い値でした。ススキについては前年同様にネザサよりも最大高が高く(図1)、平均被度は26.0％と前年度とほぼ同程度に推移しました。

草原生植物の被度合計は前年よりもやや減少しましたが、近年は横ばいの傾向を示しています(図3)。草原生植物の種数については2009年以降はほぼ横ばいといえます(図3)。

(2)調査区3の状況

今年度は夏のネザサの選択的刈り取りを実施しました。ネザサの被度は前年よりも減少し51.7％(図2)に、最大高は0.43mと前年に比べわずかに高くなりました(図1)。草原生植物種数は12.3種とやや増加し、被度合計は4.75％と昨年から微減しましたが近年の傾向としては横ばいといえます。これらのことからネザサの被度が上記のような水準であれば、草原生植物の生育を妨げることは少なく、草原生植物の種多様性は高く保つことが出来ると考えられます。ススキは最大高が1.20mとネザサよりも高く維持されており(図1)、被度は58.3％と昨年度と同じになっています。

(3)調査区4の状況

今年度は秋のみ刈り取りを行いました。ネザサの最大高は0.43m(図1)、被度は80.0％(図2)でここ数年は横ばいの傾向です。ススキは植物高が1.33mとネザサよりも高く維持されており(図1)、被度は35.7％と前年度と同程度を維持しています(図2)。草原生植物の被度合計は前年より減少しておりますが2015年の水準を維持しています(図3)。種数は7.3種と近年は横ばいの傾向です(図3)。

(4)調査区5の状況

今年度は夏のネザサの選択的刈り取りを実施しました。ネザサの被度は26.7％と前年より微減し(図2)、最大高も0.47mと低くなりました(図1)。ススキについては植物高が1.27m(図1)と微減していますがネザサよりも高く維持されています。ススキの被度は70.3％で、活動開始以降順調に増加しています。草原生植物種数は13種と横ばい、被度合計は5％と前年度より減少しましたが、高い水準を保っています(図3)。

(5)調査区6の状況

今年度は秋のみ刈り取りを行いました。ネザサの被度は前年よりも微減し28.8％となり(図2)、植物高は0.47mと横ばいの傾向でした(図1)。ススキについては植物高が1.17m(図1)と微減、被度は50.0％と微増しました。草原生植物種数は17種と前年とほぼ同じでした。一方、被度合計は4.4％と前年度より減少しました。草原生植物の被度合計が11年間で大きく変動していますが、活動当初と比較すると高い水準で維持されているといえます(図3)。

(6)まとめ

夏にネザサの選択的刈り取りを行っているNo.3、5、6ではススキの被度が高い水準に到達し、維持されていることがわかりました。秋のみの刈り取りを行っているNo.2、4では、ススキの被度は20～40％まで増加した後は横ばい傾向にあり、十分に高い状況とはいえません。しかし、ネザサの草丈よりも高い状態で維持されており、ススキ草原と呼べるようになりつつあります。ネザサの草丈を0.5m程度の高さで抑制できればススキの優占群落を維持出来るといえそうです。また調査区No.2、4の結果は年1回の刈り取りでも継続すればネザサの草丈を低く抑えられることを示しています。

草原生植物の種数や被度を高い水準で保つには、夏のネザサの選択的刈り取りの実施が欠かせません。特にスミレ類やニガナ、ヒメハギなど小型の草原生植物の増加を促すには、夏のネザサの選択的刈り取りは不可欠です。

現在までの調査結果から、現在の東お多福山では、5㎡の中で生育出来る草原生植物の種数は多くても20種程度が限界のようです(図3、No.6)。このことから、今後は5㎡あたりの種数を20種以上にすることではなく、草原の様々な場所で20種程度の植物が普通に観察できる状態を目指すことが大切といえそうです。

東お多福山の植生をススキが優占する草原とする目標は、ネザサの草丈を0.5m程度に抑え、ススキの被度を50～70％に回復させることを目安に年1回の刈り取りを継続することで達成できそうです。しかし、草原生植物豊かな環境とするためには、管理面積を広げ、それらの回復が期待できる場所を探して夏のネザサの選択的刈り取りも実施して、草原内に残る草原生植物個体群の保全箇所を増やしていくことが必要といえます。

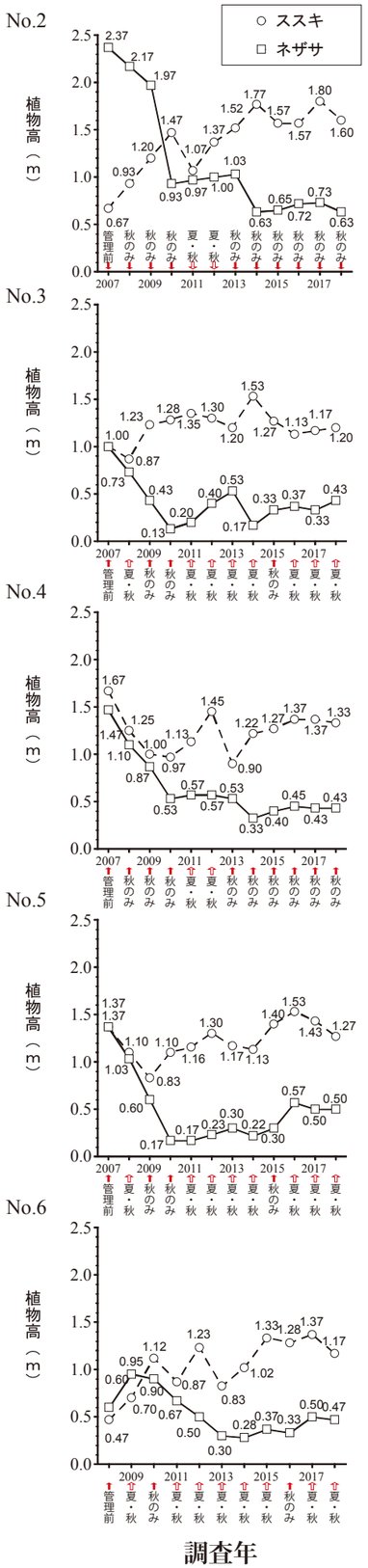


図1　ススキおよびネザサの植物高の推移（秋季）
⬇は刈り取り時期を示す。夏はネザサを選択的に刈り取っている。⬆は秋のみ、⇧は夏(ササのみ)・秋の刈り取りを行ったことを示す。

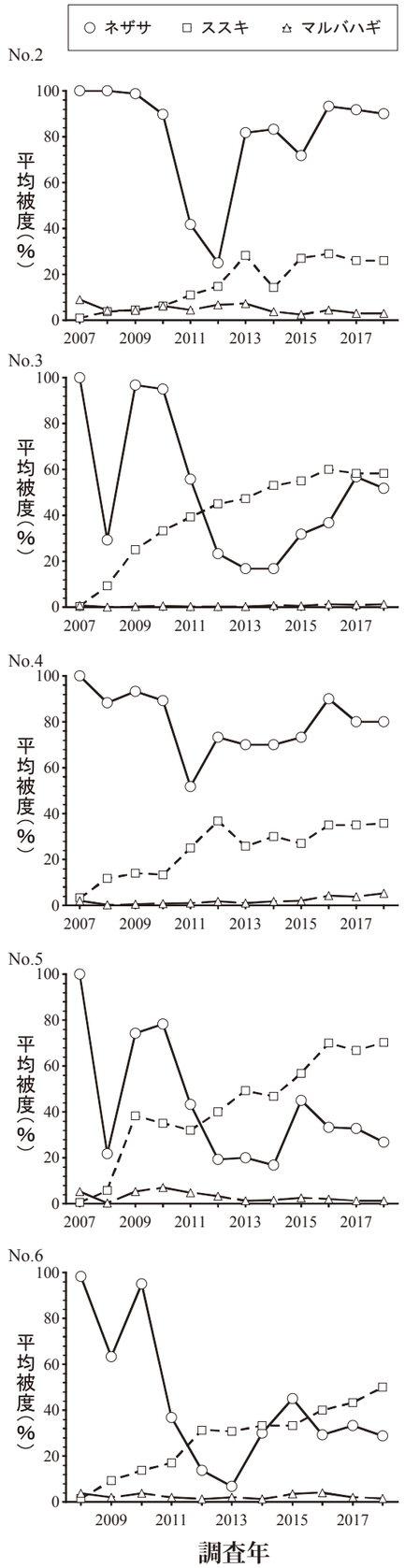


図2　各調査区におけるススキ、ネザサ、マルバハギの被度の推移

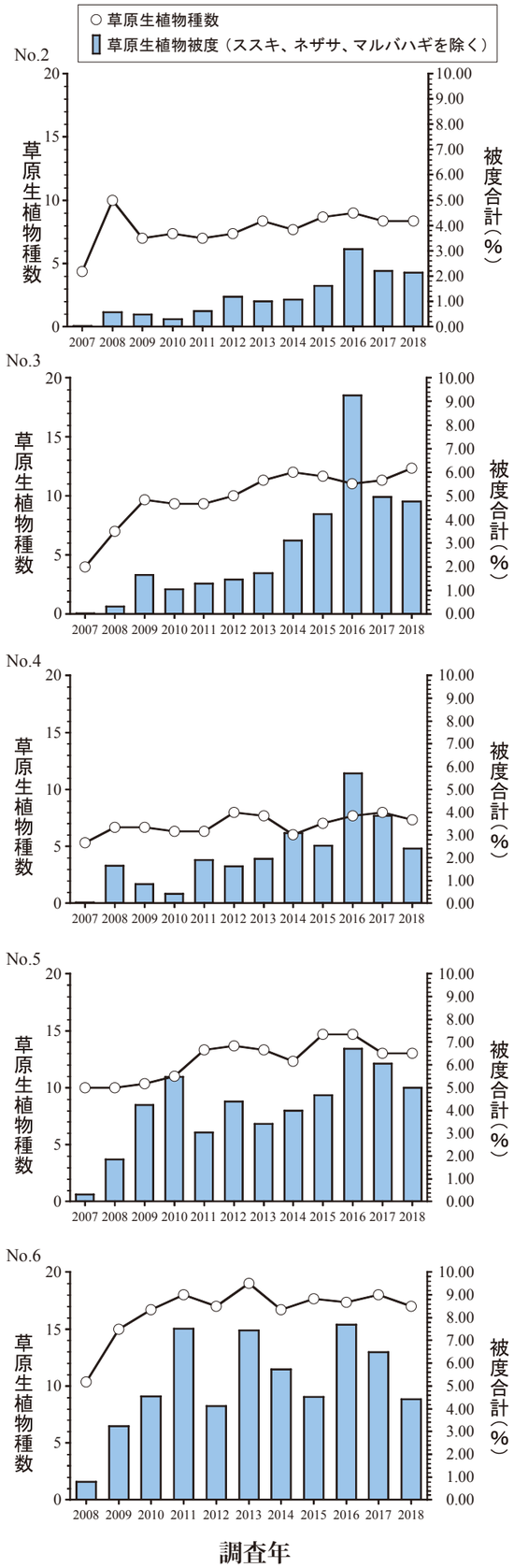


図3　各調査区における草原生植物の種数（折れ線）および被度合計（棒）の推移（被度合計についてはススキ、ネザサ、マルバハギを除く）

東お多福山草原保全・再生活動10周年記念シンポジウムを開催しました（平成29年度事業）

（橋本佳延）

平成30年2月17日に222名の聴講者をお招きして「東お多福山草原保全10周年記念シンポジウム」を実施しました。当日は4人の演者から、まちなか、ゴルフ場、畦畔など、関西での身近な草原の魅力や、その草原を未来へ継承する上での課題について紹介いただきました。

またパネルディスカッションでは、東お多福山草原を150年後の未来に残すために何が出来るかについて、市民団体、研究者、茅葺き職人、行政の様々な立場のパネラーが議論しました。東お多福山は他の草原と異なり、多様な人々が協働して活動に取り組んでいることが特徴であり、さらに取り組みを充実させるには、東お多福山の持つ多様な価値をより多くの人に知ってもらうことが大切であることが確認されました。

聴講者のみなさんへのアンケートでは、45％の方が東お多福山草原の活動に参加したいと回答くださいました。また「ススキが回復していく様子が嬉しい。」「若い頃のススキ草原を懐かしく思い、かつてのように様々な草花が見られるようになることを夢見ている。」といった感想が寄せられました。

草原を保全するには毎年欠かさず刈り取りを行う必要があり、面積が大きければ労力もかかるため、多くの人の力が必要です。そのためには多様な参加形態を模索するとともに、集まった力をまとめていく役割がますます重要となっていくでしょう。今回のシンポジウムを弾みに10年、20年先の活動につなげていきたいです。

プログラム

13：00　開会挨拶　　武田義明（東お多福山草原保全・再生研究会　会長）
13：05　趣旨説明
13：10　事例報告
13：10-13：30　**都市の遊休地に残る小っちゃい半自然草原の意味：吹田市の千里ニュータウンの例**
　横川昌史　（大阪市立自然史博物館　学芸員）
13：30-13：50　**伝統あるゴルフ場の草原生植物の生育環境としての可能性**
　松村俊和　（甲南女子大学　准教授）
13：50-14：10　**都市近郊で管理放棄された半自然草原の再生**
～東お多福山草原の保全・再生活動 10 年の効果の検証
　橋本佳延　（兵庫県立人と自然の博物館　主任研究員）
14：10-14：30　**都市近郊の水田生態系における里草地の草原生植物の多様性**
　丑丸敦史　（神戸大学大学院人間発達環境学研究科　教授）

14：30-14：45　休憩（15 分）
14：45-16：25　パネルディスカッション
「都市近郊で大規模草原の生物多様性を保全するには？
～六甲山地東お多福山草原を 150 年後に残すために
民官産学ができること～」

【パネリスト】
桑田　結　（東お多福山草原保全・再生研究会　副会長）
相良育弥　（淡河茅葺き屋根保存会くさかんむり　代表）
横川昌史　（大阪市立自然史博物館　学芸員）
道木柳太　（神戸市森林整備事務所　所長）
竹村忠洋　（芦屋市教育委員会社会教育部生涯学習課　学芸員）
小谷寛和　（兵庫県神戸県民センター　神戸魅力づくり参事）
小舟美帆　（環境省近畿地方環境事務所神戸自然保護官事務所　自然保護官）
【コーディネーター】
橋本佳延
16：25　閉会挨拶　　桑田　結（東お多福山草原保全・再生研究会　副会長）

神戸県民センターとの協働ですすむ、東お多福山草原保全・再生活動

（研究会理事会）

東お多福山草原の現地活動は平成19年11月からはじまりました。この活動のきっかけは、平成18年度に兵庫県神戸県民局（現　神戸県民センター）主催の六甲山系里山研究会で東お多福山ススキ草原の保全上の重要性が指摘され、神戸県民局から発行された「“都市山”六甲山の植生管理マニュアル」にまとめられたことに遡ります。そして、里山研究会に委員として参加したブナを植える会の会長の桑田結氏（現　当会副会長）が、神戸県民局の呼びかけに賛同し、県民局との参画と協働をベースに、複数の市民団体に活動への参画を募り、県立人と自然の博物館に学術的な調査や活動のサポートを依頼して環境を整えたことで、現地活動が実現しました。

活動当初の各団体の役割については、市民団体は「刈り取りを主体とする保全活動」を、神戸県民局は「土樋割峠に向かう道路の通行の手続きや普及啓発などのソフト事業にかかわること」、神戸市は「土地利用に関すること、神戸市域の登山道管理に関すること」、芦屋市は「土地利用に関すること」、環境省は「国立公園内の許認可に関すること、国の自然環境施策の情報提供に関すること」、人と自然の博物館は「活動の生物多様性保全効果の検証」を担うことになりました。この分担は関係団体が主体的に参加する、2～3ヶ月に1回開く定例会で相談しながら形づくられてきたものです。特に神戸県民局は、東お多福山での活動を公的な取り組みとして位置づけ、信頼性を担保する力を与えてくれています。様々な団体の力が1つに結集され、現在の成果があるのも、そのお陰といえます。

また、右の年表からわかるとおり、神戸県民センターは、活動を円滑に進めるための関係団体への仲介やガイド養成講座の実施、パンフレットの発行などの普及啓発活動を率先して実施してこられました。この11年間の活動は神戸県民センターとともに歩んだものであると言っても過言ではありません。

東お多福山草原を未来に継承するには、地道な活動の継続が不可欠です。神戸県民センターには、わたしたち市民団体だけでは担い切れない重責をともに支える仲間として、今後も積極的に保全活動に参加していただくことをお願いしたいと思います。

表　東お多福山草原保全活動における兵庫県神戸県民センターと当研究会との協働の変遷

活動年度	協働内容	刈取活動頻度および面積
平成18年度（2006年）	神戸県民局（現　神戸県民センター）が六甲山系里山研究会を開催し、東お多福山草原の保全の重要性を確認、「“都市山”六甲山の植生管理マニュアル」が神戸県民局により発行され、東お多福山草原の目標植生と管理方法が提示される。	
平成19年度（2007年）	ブナを植える会より東お多福山草原の保全活動に対する協力を神戸県民局に申し出たことで、行政と市民の参画と協働による活動がはじまる。	年1回（500㎡）
平成20年度（2008年）	神戸大学を会場として東お多福山草原保全・再生事業の参画団体（市民団体、神戸県民局、神戸市、環境省、神戸大学、人と自然の博物館）の会合を定例で開催するようになる。	年4回（600㎡）
平成21年度（2009年）	任意団体としての研究会設立の検討が始まる。神戸市および芦屋市の土地利用許可が3年ごとの更新でよいように認められる。	年4回（600㎡）
平成22年度（2010年）	神戸県民局が冊子「自然との共生と六甲山の保全・活用を目指して」を発行し、県民局の東お多福山草原保全の取り組みをPRする。神戸県民局との共催により、東お多福山草原保全・再生フォーラムが開催される（県民局予算）。 国立公園六甲山地区整備促進協議会（事務局:神戸県民局）との共催により「六甲山環境保全・活用体験ツアー」の一環として笹刈り体験ツアーを開催する。 兵庫県より「ひょうごの生物多様性保全プロジェクト」に認定される。 土樋割峠に向かう道路にチェーンゲートがなされるようになったため、通行に際して芦屋市道路課に鍵を借りるようになる。鍵の借用は神戸県民局が担うことになる。	年4回（600㎡）
平成23年度（2011年）	東お多福山草原保全・再生研究会が正式に発足（7団体）。 神戸県民局主催の「六甲山生物多様性保全活動体見学」が実施され、研究会が協力する。	年4回（8000㎡）
平成24年度（2012年）	東お多福山草原の保全活動計画の作成について、研究会より神戸市および芦屋市に対して生物多様性地域連携促進法に基づく提案を行う。 神戸県民センターより研究会に対して東お多福山に関連する県施策の相談があり、ガイド養成講座の開催を提案する。 神戸県民局が研究会との連名で環境学習教材「六甲山地東お多福山生きものゆたかなススキ草原をめざして」を発行する。	年5回（8000㎡）
平成25年度（2013年）	神戸県民センターが研究会とガイド養成講座（第1期）を共催する。 定例会議の会場が神戸大学より神戸県民局会議室に移る。	年5回（8000㎡）
平成26年度（2014年）	神戸県民センターが研究会とガイド養成講座（第2期）を共催する。	年5回（9029㎡）
平成27年度（2015年）	神戸県民センターが研究会とガイド養成講座（第3期）を共催する。 東お多福山草原古写真展巡回展を阪神間7箇所で開催する。 芦屋市文化財（会下山遺跡）の高床倉庫（復元）の屋根材（茅）として東お多福山のススキを提供する。 研究会がガイド部会（仮称）を設置する。 研究会が「古写真から紐解く　六甲山地東お多福山草原の移り変わり」を発行する。	年6回（9029㎡）
平成28年度（2016年）	神戸県民センターが研究会とガイド養成講座（第4期）を共催する。 環境省近畿地方環境事務所主催「昆虫博士と歩く!初秋の東お多福山～森・草原・虫の話～」にガイド部会（仮称）が講師として参加する。 道路地権者の意向により、土樋割峠への車両通行が月1回2台までに制限され、芦屋市道路課が通行時使用する鍵の返却を保全活動日ごとに行うように方針を変更する。 神戸県民センターの働きかけにより、芦有開発の駐車場を活動時の資材運搬車両の駐車場を借りられるようになる。	年6回（9029㎡）
平成29年度（2017年）	神戸県民センターとの共催によりガイド養成講座（第5期）および修了生対象のステップアップセミナー（早春および初夏）が開催される。 神戸県民センターよりガイド養成講座（第6期）の開催を休止し、ガイド修了生の協力による親子ハイキングの開催が提案される。 研究会主催で東お多福山草原保全10周年記念シンポジウムを開催する。	年6回（30000㎡）
平成30年度（2018年）	神戸県民センター主催の修了生対象のステップアップセミナーに協力する。 神戸県民センター主催より親子ハイキングが開催され、研究会ガイド部会（仮称）が実施協力する。	年7回（30000㎡）

東おたふく山で自然を学ぼう! 親子ハイキング

（池内 清）

平成30年10月、兵庫県神戸県民センターの主催で、ガイドメンバーが講師役として初めての一般募集者を対象とした東お多福山の観察会を行いました。

12名のガイドが3班に分かれて対応し、各班は、基本的にはそれぞれにコースをパート分けして案内を分担して行いました。

今回は、「東おたふく山の自然を学ぼう」ということで、自然の面白さに開眼してもらうことに重点を置き、五感を使っての自然の楽しみ方を意識して案内しました。秋ならではの話題として、ゲンノショウコの面白い種鞘の形や、種子を飛ばす仕組み、キンミズヒキやヌスビトハギ、チヂミザサなどの「ひっつきむし」と呼ばれる付着散布方式、カエデ類や、ハンノキ類の翼のついた種子による風散布、マツグミなどヤドリギ類の鳥による被食散布など、色々な種子散布を紹介できました。

また、自然の中での相克として、カシノナガキクイムシによって枯れたコナラと、防御して生き残っているコナラ、ハイイロチョッキリによるコナラの小枝落としとドングリの中に産み付けられた卵などの観察を行いました。

鼻を使っての観察は、クロモジ、ミズメ、ヤブニッケイ、サンショウ、イヌザンショウ、草原に入ってからは、かしこに見られる、リンドウやツリガネニンジン、オミナエシ、アキノキリンソウなど多様な目で楽しむ草原植物、苦みで薬効も感じられるセンブリ、イタドリの笛やアカメガシワのカバン作りで遊び心、と多様な自然の楽しみを堪能してもらえたことと思います。

穂が秋風に揺れるススキ草原の中で弁当を食べ、土樋割峠の名前の由来や歴史、山頂付近のカヤの活用を目的とした入会地の歴史、また東おたふく山の成り立ちと断層の話など地質的な背景も交えて草原の変遷も解説しましたが、採草地としての役割を終えた今、新たに見直される東おたふく山の存在意義をこの観察会で見出していただけたのではないかと思っています。

ススキの収穫と茅葺き屋根への活用

（淡河茅葺き屋根保存会「くさかんむり」 阿部　洋平）

東お多福山では、2015年度から元気に育ったススキを冬に鎌で収穫して、1束周囲30cm程の束に仕立てて木に括り付けておき、春にみんなで担いで下山します。収穫量も初年度は30束程度でしたが、その後収穫量は16年度50束、17年度70束と順調に増加し、今年度は約90束も収穫することができました。

こうして収穫されたススキは屋根葺き材の「茅」として、神戸市内および兵庫県内の茅葺き文化財の修復工事に使用されています。2016年度は会下山遺跡高床倉庫（芦屋市）、2017年度旧小阪家住宅（尼崎市）、2018年度はＴ邸（神戸市）へ納品されて屋根の一部となりました。東お多福山のススキは軸が細目で背丈もそんなに高くなく、しなやかできめが細かいのが特徴です。大事な部分の仕上げに使いやすい、もっと欲しい！と茅葺き職人さんにも好評です。東お多福山の茅だけで1軒の屋根を葺く日がいつか来ることを夢見て、またこれからも活動に励みたいです。

東お多福山で収穫され干されている茅（2018年11月）

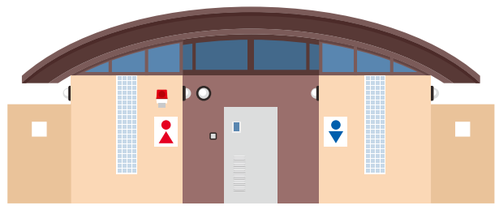
東お多福山の茅も利用され葺き替えられたT邸の屋根

東お多福山草原の保全・活用にはトイレ設備が必要

（橋本佳延）

当会の11年間の活動により東お多福山山頂部のススキ草原は、春はスミレの花が咲き誇る草丈が低い姿へ、夏は青々としたススキとネザサの混生する中にササユリの大輪の花が咲き誇る姿へ、秋はススキの穂がたなびきアキノキリンソウやリンドウの花々が咲く姿へと回復してきました。

多くの人に、このような東お多福山草原の良さを伝え、保全の活動の輪に加わっていただくためには、草原に足を運ぶ人を増やす取り組みが欠かせません。当会でも観察会やハイキング、刈り取り体験などの様々な催しを実施してきましたが、毎回、集客のネックになるのがトイレの問題でした。近年では野外で用を足す経験がない人が増えています。特に、長時間の草原活動へ女性や子どもをいざなうには、また、小中学校の環境学習の場としての利用を考えた場合にはトイレ設備は必須でしょう。野外で用を足すことは、環境にも負荷を与えます。現在は簡易テントを張り、携帯トイレの使用をお願いしていますが、使い慣れていない人も多いのが現状です。

残念なことに、東お多福山草原に最寄りの常設トイレは芦有ゲートや六甲山山頂にしかなく、草原内での活動の際に利用することが難しい状況です。研究会内では、利便性やメンテナンスの点を考えた場合、土樋割峠付近にトイレが常設されることが望ましいのではないかと議論しています。

設置にあたっては土地所有者の合意や、環境省との折衝（国立公園内での行為となるため）、設置予算の確保、メンテナンス体制、また利用量予測調査など様々な検討が必要です。東お多福山草原の保全の継続性を高めるためにも、トイレの設置にむけての議論を進めていただける方、お知恵を貸してくださる方は、是非、研究会事務局までご一報いただけると幸いです。